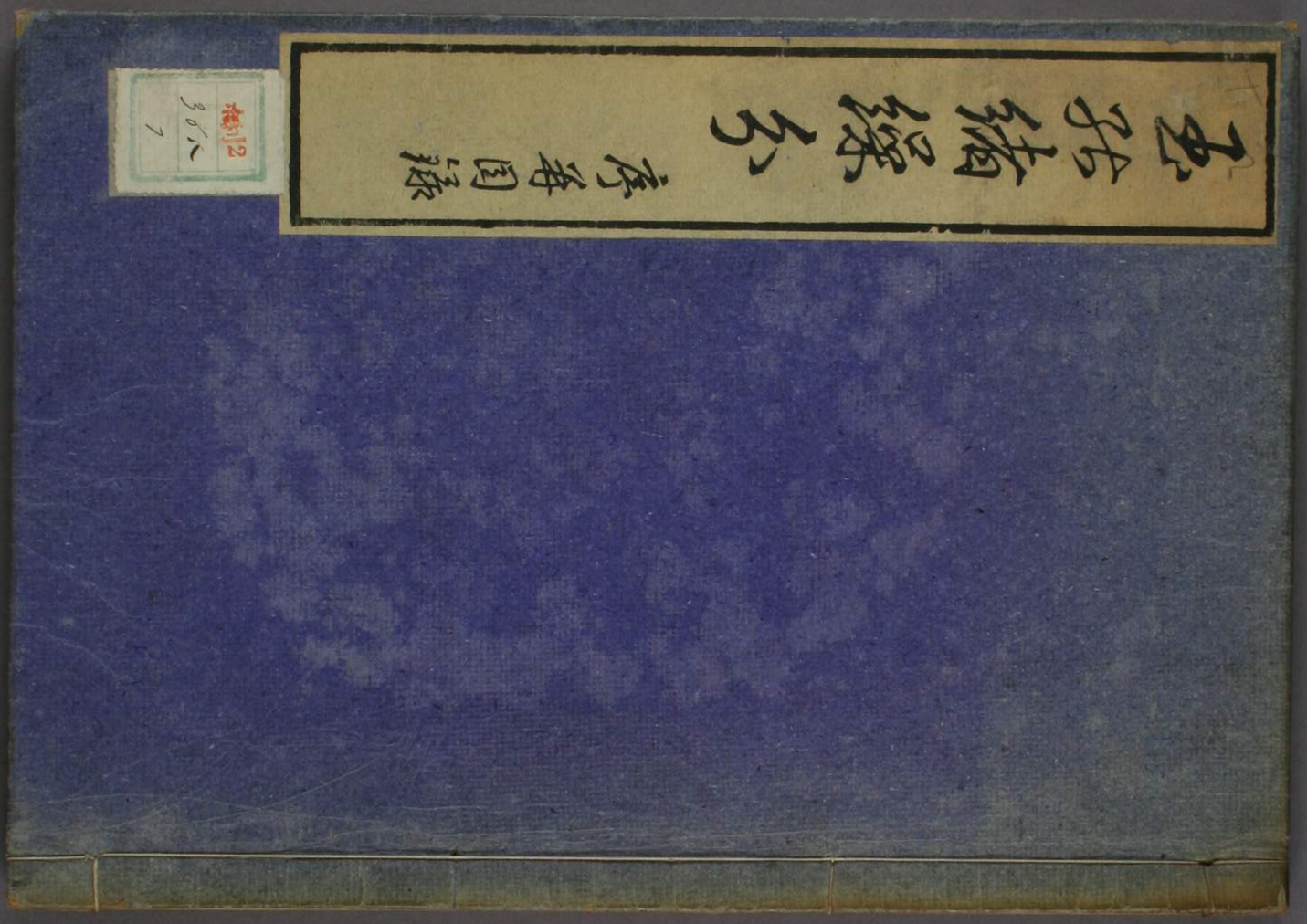
東海道五十三次
東海道
五十三次

義門大德著　全五冊

# 玉篇綜分

京攝三書房合梓

東京帝國大學圖書
明治廿四年十月廿日購求
和 265 ロ 1

○玉のをさめ分

序

高僧淨土宗をおこすこの玉篇綜分

小演を義門ゆるす八年ころ已ゥ

もとかの本願寺に行るつゐるに

きりくの事ゆゑ僧なわ玉まよこゑそれか

第八巻和語説略圖といふものを

始終ともに異なる孔雀の羽
毛何れもこの星なれば第八つ
考へたる有らんを例の第二
又是れ有りてひつく訪ねきたれば
併乃ち一枝を切りてとらるゝ

やうにとの志のくなく信ずべ
考へたるやう書なれば信ずべ
いかとしかれども
出ずして書と毎度変ず
とて万のはもとくなるをとる

○王のをくり分

○序二

二種あり一を詞乃玉緒と書て
古今和歌集の物名の部にて
見るなれと猶しるしの所なき
今一は玉緒繰分とて
雑の部にて

玉緒繰分目録


一丁右　くりまけ造れるたこり

二丁右　後鈴屋翁のそのがくり


此くりまけをこゝに人八必詞の玉緒一部と略図一部とをかゝ
らせ給ひてみべしゝける八此目録のこゝをこゝに便りもなくさ
て又此目録みて本文を早く解る助とをべきよしをあら
十九左そおづいづのづ活く枕ことといへるが如き此目録と
又て本文氏生十九左ていでと云ていぢといまだそおぢ
ゝ云てそおでといまだと云へるをよく考得べきなり

○氏巻目録

同左　かゝることゝ人の詠をとゝゝめれば　なる事

同　氏爾乎波の数の最モ先よりと思ふるハ如何なること

三丁右左　○△◎のちがひの凡例

同左　本書玉の緒に欲知文字と題けるふきての事

四丁右　うちひあふといふ、うるへあハぬと云こゝのり先

同右左　くゝのへ〳〵のび、ゑがめ　ゑがゝの類自化相ひゝる事

九右　かりゝあを写し誤まるゝれこと

同　後の世といふ詞の義

同右　幾くなん　はつ　いつ　ちる　ちど云へるところへと一つつ

と入もまかりきよう

同左　のの乃むもびにてなりたるこそきれたる事

同　何の結びの中にそきれたる例　証

六右　のの乃結びのゝなる事

同　ときてきのこての詞の活ら義

同左　のの乃むもびかゝなる事

同　ありとハきけどゝるよりもなる　といへる事

七右　何の結びかゝれ奇

同　こその結びかゝの例

同左ヨリ八右　ちき　せゝ　せゝ　ゝる事なる例

同右左　石年の宮こやとゝ　あそびこの奇れ校異　一二五の三句いつも異

同のてこをは考べきあり

八左　何とかの図して何とそとうつくもゝ玉ぬもあるぬことの添め

九右　しゝと留るうつくりの事並びハ截るこゝ切つゞる事

十右　てゝるれゝと活きてて文字の截断言とちゝハりゝ有てといふ

詞一つなる夫ゝ

十一右　なりこきるゝ詞を受るとつゞくを名ちゝめ二つ有る事

十一左　ものの留りたりなる又そこ[illegible]何の例こ引べき分の事

十二右　何の詞下ふりといちゞゝして仮ゝ[illegible]ゝと活へる分

同　ものの活びめりのたしゝちゝと例

同左　や何　める

こそゝと云ひてめれゝと留る分

十三丁　四段の活語のけせてへめよりらりるれゝと活きる詞こて留る

るゝゝども

十四右　万八五二ゝくぞもゝ[ぞゝ]の分ハ或説こよれバゝくれ証こあゝぬ事

同左　誰ゞ何ゝといふこ等しきさなこそ誰ぞ何ぞなどいへる例

十四左十五右　うゝゞ城おゝゞこあこふれちゝいゝと事と何ゝ誰ゝと結こゝとの事

十五右　紫式部の無注ぞ位めるとよめる分のてふもの義

同　めるとつるゝとの大ようそのこうれめ

同左　為来得寝経と類へてあれど為来ハ別こ一種のゝくゝき自

命々然らぢる事

十六右　徃るゝといふ詞ハ一種別みる活用なる事

十六左ヨリ　玉緒なる引言の中ゝ外の処へ移して可ゝへがうる海め

十七右　のゝと云て落ゝ・ゝと云て事ゝ留れる類并一首の言れ上ゝて

さゝる活びの二処にゝる言もある事

同左ヨリ　う右うゝゃうれゝと一ゝ出あゝ活ゝきゆゝう

十八左　さゝぐゝ　ゝ向ゝ　此二の活きゝと同しかゝぬゝと

十九右　佐行下二段活の痩す多行下二段活の出づれ留りの一首の中

ゝなる例

同　活の証言の事

同左　それづいづのづ活くやうハ中二段と下二段とゝ分れ有事

同　のの活びつるとせる言れあゝ

同ヨリ　二十右　六帖なる　それづれゝいへるゝ引うへて日書なる出づれを

出さだやゝ思ふ事

同右　往ぬのぬゝ尋ぬのぬゝとハ活き別きにゝる点

廿一右　言ふる　遠ふるの二つも活らきさま同しゝぬゝ

同左　をみあべゝ活ゝ言や玉そふるのふハ活るべきれ事

廿二右　ふる　遠ふるのふるゝ生ふるのふるゝとの用きさ活同し

同　うらぬ玉精ゝ辨ふべきさぐ

言の例証のさそゝてきれゝ言、并　活む の中ゝ截ゝるさそゝ

同左　てきもてゝる　云云

とよむのむ　ハ下二段活なる　恨むのむ　ハ中二段活なる　を同つゝ引るハゝゝ細

うゐぬ事

廿二左　一首のまうてきれうる何□□るの例

□ヨリ廿三右　こやまをこやと云誤れる事　英二や　ゆる　の証句のいろゞ

ちき事

□　徒の証のるの句補

□　ちくをちて〻誤れる事　英二彫刻者の失の事

□左ヨリ廿四右　うゝるうゝるうゐと清ゴハらゞの例証出べき図

□右ヨリ廿五右迄　玉の緒卅六丁左　た　を　徒　などある下へ補入すべき証句

□右　白ハゝ白ハるゝしの辯へ

玉の緒卅七丁より四十丁までの処〻へ補入すべき例とか

□左　と　のうりまて　る　と結べる句

廿六右　花也ゑ小云云　云云　き　の句に付ての義

□　ゆめ〻清くハ推ハうり、或ハ作るゆ　なり、然ハ清ゆハ預ふ

ゑのゆ　まて、三時ゆ　あるとゆ〻ゆとあれど其ゆめ〻ハ

れぬゆ　も、ぞや何へハかゝらゞど　の　へハ狂〻る事

廿七右　はゑ清又の乃結ゆる預ふゑのゆ

□左　れゆ作るゑの八連用ゑを文〻形ふゑの八將然ゑを文とゆる事

□ヨリ廿八右　ぞ〻かゝりて形ふゑのゆ　まて結へとみ〻るゝ写し清

かどなるこゝ

□　ハ活らゆ詞と決むるじ歌事

廿九右　徒の留りまゝの事

同　のの留りまゝの事

同左　こそのむすびのまゝハ即行の結びのまゝの活なる事

三十右　まゝを三特の外とハいふ又じ事

同　ゝ　たくハゝ　きとも云ひ〜欲く思はあゝ

同左　ハきゝく詞ゝ　てつの活きのつの連用云ゝ心

もゝる語なる事、ハ行の事ハ月巻四十一　もゝ

巳下をもゝ見ぬまゝ

三十左　ゝなハ活らゝぬ辞

廿三右　初学を教へゝる者　ぞゝこそ　もゝゝ　ようてゝ　ようのゝ　思きや

といふて張ちやゝと思ふハ非るまゝ

同　だゝ　已然を受るゝ　将然を受るゝ　言得るゝべきゝること

同左　まゝゝバハ将然のかゝ孔已然なるまゝ

同ヨリ　廿四右　かゝゝなる後ぞ袖ゝの奇れをゝりようゝへる処ハせきあゝバ

なるへきゝれ事

同左　ゝゝバだゝ留れるもまゝゝだゝ留れるもれゝふ上へあるゝ人ふ

言を含むゝなる事

廿五左　をゝをもゝゝ玉て上へゝゝての留り処を故ゝゝ抱せる言

同　ゝその留りあゝても上へゝゝ言波含めて云捨ゝる行る事

廿六丁　べゝより上へゝゝて留る詞のたゝひよゝ長ゝ　なゝ

多かる事

卅七右　連用云を一首のをハりニおくる例これ少くしてつく夢
も□例ある事
同左　□
べくより上へ反るハ多くハ作る詞希求の詞類ハ同など
なる事
卅八右　形状言の連用云どゆりの字まれニハ希求云などならん詞
へうへれるもあるなを
同左リ　一首のをハりより上へうりて留れる例ども後〳〵
卅三右　躰言どゆりの字
同　至なる語録の事
同左　変格ゐぢと定例なづれ□る□す□ゆ□の類ひある事
卅四右　連躰云留りの字ニハ上ニ□といふ詞の有ゲ多き事
同左　連体云留りの字ハ必いひのこせる詞あるなを
卅五右　志ら波　まち　誤写の事
同　あにまちらめやの事
同　いっあり〻とよむあ〻
同左　□れ□ほどへぬ、□れ□ぞ□、といへる語格
卅六右リ　□く　続び〻□つ、をハじめそれ〻の例あまたあるに附ての論
卅七右　淡路略云云　拾遺を　の異本などの事
同左　□れ受つ〻いへる語格
卅八右　□□□□
同左　そのや何の末をきるく詞ニて留るとおがしき例ども

四九右　てゝをは不調奇小附てゝの事

同　ゝるゝ〜もなき〔き〕々誤字のかゝてそあれのさゞ

五十左　新勅十八拾じゝに云云自て後人のゝそゝ〜ゝらんゝの事

同　花ゝ〜そゝ〜〔ゝ〕とあるゝつきてゝ〔　〕取ハ容易くにまぎ

〔ゝ〕

五一右　夏歌を除しゝゝるゝ山川ぞ、のぞ。

同　歌仙集校異の一本の事

同左　そゝかちつゝの云〜〔云〕と曲たるハ実ハまゞ云〜まゝぬ歌べき事

五二右　祝ゝ〜ぞゝ〜〔ゝ〕字誤なゞゝるゝ〔ゝ〕の論附新恒集のゝ、きゞ〜〜

なゝるのゝぞゝありけん〔ん〕の事

同左　貫之集云〜　鈴屋のいゝるゝ〜ゝれさゝゝん異本のやう

五三右　万葉の歌をあゝ〜ゝ誤てゝ歌仙集ゝハのせゝゝる事

同　おもゝげを〔いゝゝ〕ゝゝれぬ云〔云〕ハ本歌ゞりのあらんの考

同左　於六旅ゝゝバ云〜　字誤あ〜んのさゞ

同　まゞ〜れ云〜

五四右　ゝ〜ざゝき秋の塩ゞを〔ゝ〕の歌の結句ハ今の続千載ハ字〜誤

なゝる事附え捕集のゝ〜ざゝき云云

同　ゞ〜ゞの活き友鏡改むへき事

同左　悪〜きゝ云〜なきゝ〜ゝち〔ゝゝ〕ハ変格ゝるゝ〜

五五右　ゝ〜ゝ〜ありとゝそきけ〔け〕と云へゝ〜思ハるれゝゝちハゝゝぬ事

五五右　いやしげ[illegible]てとくの八べ」と云べきなりざくうゝ

同左　一本て小を付を語れりといふ字に付ての論

同　八れなおに色をだうへられて梅花」の字「素知[illegible]」の字

同左　八ゃうの実云云なれもうなり」や「そのなりき」とうるゝ、却りて

よろしからんと思ハるゝ趣意

同　「イとしるもの」「色」の義

同　うひよとハなり」の字の事

○爾巻目ろく

一丁ヨリ　行くの結びといふハ詞の截断〜歩り活る処居る処をいふ者

るゝ光

一丁ヨリ　自　五一鎖　三一光

三右　ぞと云てるゝ留りこそと云てもとゝ留る互に云ぶべくよへる

もあり又必ず云後ゝるゝもある事

同　むゝのこと云て不[illegible]のことなれる八五月雨の字に限る不非る事

同左　五月の名をちぐれといふ欲の義

四右　将然連用截断連躰已然とおのづゝあるついでの事截断云

の表中にあるぬ用

同左　あだゝてだゝ又てゝとふゝとのくぢめの大ゝ

五丁　てたゝゝれバを約め云といふひが説の事

六丁右　だゝ云ゝちめゝる字にハ已然受ゝるでにても将然受ゝるで

ゝてもまぐて余意を含める多ゝ事

六左　ほどをへてゝ〻くだやの云ひ初句てだりてれの清ひちぐ
二右　ゝりいゝ有といひある所の句のてゝ
八右　あひ又そぞろぐさむやとぞ」のてゝ
月　将然云受るたの末ハ必ま〻べ〻るどの十一の辞にて意ばる定
月左　ゐだてゝの大判も
九右　輾轉といまろびのたのよみさ函
月　紫式部の集ゝのれゝある人の云ハ拍き他ゆ両模ゝ又云ゝ
ろゐ〻
月左　ゐたハま〻〻ゝ意ばる事
二右　将然云うゝるたの連躰云文るたの小意ばる辞の云ハ

月左　ま〻うたハ已然云ちんどりゝ将然云中の已然云ある意味
月　ませだハま〻〻せだのつぐまりといふハ至らざらんのちぐ
十一右　ませだのせハりゝ居るといふ佐行変格活詞ある事
月左　将然云受るたの末ま〻ゝ限らざる事
十二右　ぬゝの云のねだゝ月ト類ゝてをべてふふの云のへた一つふの
云のてだ」ろふの云のまだ」るどを例多るあと
月左　もゝぐふといへるがめくあるゝり又赤の言ある類の事
十三右　も字一ゝありて云ハも二ゝある処と文ある例
月左　一ゝもとのゝいひ今一ゝをもといひて二ゝも云ハをもある例
月　こせも文らせもハ行こせん文らせんるべき欲の事

十四右　とても世に[illegible]おどいへるとても八蛾〜き詞づかひなる事〜

〃　よもぎ〜れる紙赤字の云とのこいふハ常〜ざらん此論

〃左　ぞ〜〜〜りて哉〜いへるハ冥〜ざる事

十五右　夕をにめでゝを[illegible]まる事ぞ

〃　ぞ[illegible]も〜向ふ〜る詞のもハうろく添〜るのこゝにハ非る事

〃左　ぞ〜〜の結びを例の連躰云ゝて物せるある事

十六右　万一巻の我許曽者〜ある一本に考ても、円十生の梅花毛を考

ふべきこと

〃　ぞや〜截る〜夜

〃　尺ハ仁ぞの四〜〜ぞと云云のぞ

〃左　〜〜そむ〜」のそハ十の云ふの事

〃　もぞ〜ぐれ〜ハ〜る〜ぬ〜ハ〜りてあやぶむ〜ふ〜〜

十七右　もぞハ連用云或ハ躰言を受る事

〃左　新勅の奇の出〜やう

十八右　ぞもぞ〜いふ辞に却りてのを含めるを含ばる〜者事

〃　のハぞや何ようハ軽〜てハも使ゝやく〜ぬぐふもあるぬ〜

〃左　何〜の云〜ぐ〜〜おりる多うれどのの結びのべ〜〜ハ云ゝ

ぐき事

十九右　のゝ結びハ大方連躰云なれど〜ハ截断言〜て結べ〜

もあること

十九左　神のきりゝん」一本「神やとあれだゝん」ハいづれもまれきる、
なるあゝ

二十右　ののむすび」とうちまうせていひ出し例ニハ、拾玉の「霞の袖」
ありゝゝり」ハ、定例三條大納言の結びニハ変れる例なれバ、猶ほ
案なる「衣を」の字ハぬれゝる」の字を出さバやのちゞ

同左　の四つありてもそれ悉く云下ゝのゝのあるハ少き事

九一右　俗語ゝてゞの字ハのハふゝも用云へくる事

同　の留りれ字そのより上へくりてゝ為れる結びゝ哉ニハ限
らぬ事

九二右　用の語より文るのゝいふゝハきこゝおりふゝ

同左　用云の躰云ゝれるハゝゝ連用云ある定りもれとまれて
ハ連躰云ある事

九三右　下知の詞を文るのゝ一象出さバやのさゞ

同　の如くの云ののいと古くようあると又文まゝもある事

同左　「人あゝゝとゞ」の」とふゝ」ののゝ「よのつゆ」の」やののゝハ
きゆゝそ又二ゝ小ゝとれのゝそある事

九四右　古への今の古き新しきの語

同　書籍ゝ集之ゝとゝきつくる数の之

同左　人まろぶゝりなどのゞ字ゝもある事

九五右　ゝふゝゝゝ」の」ゝ出さるほしき趣き

廿五左　万八五月之へ花橘さらきのやとよるハげ工夏之ゝべき事
　　親のゝと云ひおやゞとハいもねど母がといひ〻母のゝハ云〻〻め
　　ゝゝひ
廿六右　ホ工似ゝるのといふべきあるべしと思ふ事
廿七　　やとうとハ云ゝてつゝひさゝゆの別工定例ある事
廿八右　□ゝやと云ゝそゝゝる工云外の云ある事
　　云ハ同〻〻れと連躰云をうけてハうといひ截断云をうけてハ
　　やゝいふ格り
　　後撰　サ[illegible]ゝのゝゝてるゞ身まうゝ工ゝる我身の上
　　人の心工あうれやけせぬ　をどのやけの誘譯
廿九右　待つやゝ□を待つゝ□ゝ混〻ゝゝまゞき論
　　人〻連用截断連躰の三をうゝめハ已然云ゝるふん□やゝ云
　　べきをめやゝいへるこゝ
　　こひざゝめゝも□こひざゝんゝも□
廿一右　アやゝいふへきを□やゝいへる例
　　□やを□ゝてこゝへきゝ付ての事
廿二右　□やそゝいふ辞
　　おいめるゝ新を□ゝるゝ□ゝつるゝ一本鶴を辞工兼ゝる事
　　□をやゝいふ辞
　　□やゝゝ□ゝたゝやゝゝるゝのゝゝゝの事

卅三右　勢語の「ものなもや」ハ真名本ニ「成者」とあれどやるやあるよし

同　左　□のや　こそや　誰や人　なぞや　いつれも軽く添くるや行れも

やの部ニ知べきうれ事

卅四右　さくやこの花」などのやくむやりぐり」などめやくの差別

同　左　月やなどやなどく及字などかゝるとそ物一つの間ニおくやりぐの

ちやゆ

卅五右　□もとやも、とうくとやの通局、

同　左　なやなどう　れやれる

卅六右　おひやうもこひめやる

同　左　ぐふ　ぐ□　つゞく詞ニつきゝ又きゝく詞ニつくこと

卅七右　動ぬ云ゝてむ□ぶ　なのなの類

同　なぞや　ときれ居られる例

同　左　□ゝせんニは俗云ニあつるニ九そ二あること

卅八右　□ゝニにくゞくある事

同　左　なふ菊　など云へるしハやはめ辞のさゝ

卅九右　誰ゝ誰ぞ又なゝう　ゝぞなど

同　□れゝさゝといふこれのそハれるあるよし

同　いゝこゝて」ハ形ふ言のてゝ　ゝ

四十右　いうこゝて」のトハん」と無ぜる事

同　□ふをてふと世俗語を文ニつくふてゝえ

○玉のをゝり分

○乎巻もく縁

初丁右 □こその結となる詞ハ仮名なる辞ゝなるが多しといへる事

同 試むといふを古くハなき詞なるあゝ

同右 □こその殺び辞俗云おのつゝゝるゝへるも少うゝとぬ事

二右 云うけゝてこそ□その辞をむすゝ丸二の例あること

同左 □こそ二つゝて殺ひ一つなる例、□こそ一ゝて殺び二ゝなる例

三右 大ゝゝやをゝほの事も云云神よりのおとゝ云云

同 却てゝ入てゝべきもこそ□又行末をかゝハるもてゝ□

もゝ文まゝもつゝふ例、

同左 已ゝ然る言ゝてもも□その殺ひのときハ行末を数ふる



詞なるよゝ

四右 □おそを□おろゝ殺べゝ古文

同左 □まゝうハまゝ□まくゝと活く詞なるあゝ

同 □こそのむ殺びゝなる例

五右 □こそゝ云てをゝ結へるハおゝと含むをあるよゝ

下左 □こそゝ云てふゝ結へるも含む意なる事

六右 □こその末をゝもゝいへるも含畜ある事

同 □こその末をゝいひて結ふ例

同 □こそをゝゝ殺びゝゝ留めゝるも含畜ある事、

七右 □こそのてゝをゝ頭ハざる奇ゝ挙ゝる事ども皆ゝくのハぬゝノ那る

うの考へ

七左　こそのまをぐしとゆふ一格

八右　栄花玉のかざりなる「ぬきぐのそ」「そ」神ゝうくまろ」を誤写

うれちぐ

「　連躰言をとうゝる一格

四左　「とおりへども」「とやえ見ひし」「とのそなれて所泣」などいへるとも

九右　いつえきとそう」なと「え」とハなきさいと

四左　などうのゝり延をそあやまるまじきこと

十右　のの結をゝがへてとゝ文る格

四左　「ゝるゝ」「ゝくゝ来」「ゝ」などのゝを與ゝゝ得まじき

十一右　「くゝとそりゝぢ」と云ゝを「解くゝ結ひて云云もゝち」と係

四　句ゝいへる例

「　ゝそゝそもだ」などゝそも二つおきそそれゝ應ずる処も

四　一つのゝなる文法

「　ゝくゝそ　くゝその云ゝを　おきくゝ」といへる例

四左　つねゝハ雖ゝと云を雖とめゝいへる羽づろひいゝ古くゝうゝえ

ゝえゝる例

十二右　「　ゝも八ゝ」「ゝ」ものそへるゝゝ」「ゝ」を略してとゝゆゝとハ云

まじき事

十二右　なぞ〳〵の辞をなぞもならんといふ説の是非

同左　なぞ〳〵ハなるべきさゞ

十三右　後拾の哥「ゆひやなぞ〳〵きれて落句の「ひし〳〵き」を別ふ考ふべきさゞ

同左　ちり〳〵きゞふ」のゝ「ちり〳〵まゞふ」のゝ

十四右　ぬれ〳〵ぬれ」「ぬれ〳〵ぬれ」の類ハゝ文字ゝ

十五右　古今集の「ちり〳〵まゞふ」のゝ「ノ」の誤りといふ説

同左　與并及の字ゝ當るゝハもゝべて連躰云を受る定り

十六右　万葉二ノ三ちゝふゝと妹が待つらんのゝハちゝといふて近きようのさゞ

同左　連躰言をバうの與字の意のゝハ那るゝゝて受る一格

十七右　ワレコレ故佛トアラハレテ」のゝをゝ乃因論

同左　やゝめのをゝ云ひまゝゝるを以用ふゝ定格ある事

十八右　やゝめゝ云ならふをゝ歎息の意味あるゝ

同左　やゝめのをある未詳ん」も結ぶゝ下知のゝ世ゝ云詞ゝて感せるかも那るゝきれゝある歟のさゞ

十九右　かゝ通ふをゝ三ツあるゝ意

同左　いたゆるやもめのをハもゝべて連用云受てハ行れの詞ゝ付べき事

廿右　古今の「秀をゝ白」のを後拾遺の「達」入て人をゝ見もゝ

ゝバ」れを全く同じきコハあゝぬさゞ
同左　万葉ある「よちゝ〳〵てゝこ神の社をねがぬ日ハなし」のを
同　あひこそバちぐさむやとぞ思ひしを」を採集コハ亦と有
廿一右　手向コハつゞりの袖もきるべきを」亦採集ハ亦
同左　人をとゝれ」去とゝ外とをゝるぞとゝろ」
廿二右　を亦留別送別の八ちめの有を
同左　塵をゞこ居るゞこそ思ふ」のを
廿二右　そやへ垣を」なゞのを
同左　風をいゝこゝ」なゞのを又万葉十二我命ゝ五とゝふだゝ」を
のを

廿四右　亦とゝへこの辨別
同左　歎息を含めるコ
同　将然ゝうけていゝるちゝくコの諺訳
廿五右　なゝコの諺訳
同　まゞこゝぬ人コちゝきくもを」の？
同左　めれコぞめれ」なゞのコ
廿六右　むとこゝて」むコこゝてなゞのとコ
同　蟲コ鳥コもコれハ外なんのコ
同　うつ墨なちゝゞ一ちちコの
同左　さきのこゝわコさきコくゝう」朝ゝげコ吾ハ外ぬゝこのコ

廿七右　何〻を何〻云云うそ　その語格

同左　用云を受るうそと躰云を受るうそとの外の躰用、

廿八右　でのおとをつゐのでなどいへるハ至つゝざらんの論め

同　ずとちとてと各活用異なる三言あひようてずーて　でーあれる事　約り

同左　うれまで　あゐのなどので別物なるゝぬ事

廿九右　流うけで　といつるも流うけなるでといちんもでこ別ハ言ぎ事

同左　なもよも歎息用云なゞ〻つるひ処こ必差別のある格

卅右　素ハつゞく詞こてもぞこそなどこかゝりてきれるこつけ

てハよゝハ云まゞ〻必なといふへき格例

同　勿を　のなつるひさゐ二ハる事





同左　莫を　の云れなの諸用云こつく杯雅語と俗云との差別

略図を按〻てゆふべきよ〻

同　莫と歎とのつき処の格例混ぜるじき事

卅一右　莫のつき処田舎の平語こハ古昔の正しききくあるあり京羽ハ俗

びハて〻る事

同左　ふき　なち〻しそ　を　ふきな　ち〻しそ　とやうこ唱ふるち

ろろきよ〻

同　なゐそのなそ躰言用言ともこうけ連用連躰いつれへ

も付る事

同　なゝ〻ぞれるハ字語うのさゞ

卅二右 そゞろに古人を非議すべからざる心得

同左 ちりぬべし」などのこ

同 天の川云てまつにくるし」などのこ

卅三右 あはむとそ」などのこ

同左 見えしえしとずし」などのこ

同 なきつゝ失ひつ」などいふハ雅にハなき造語ある事

卅四右 障見縦見ゆるしてゆるへてよそさるの意を非

同左 よしなしの格例の復のさぶ

卅五右 んよんなゝ又じよじななどハ両方あれどつかひ処によりて意ハ判れくる事、



同 不字の意の辞にハ截断のずよりもなとつゞけるあるけど

同左 よなハありなよハなき事并忘るなよなどのハ異なるを記

混ふまじきえしぐ

卅六右 よみ呼出しと歎息と希求とある事

同左 よなにぞ歎息のと希求をつよくいはん為の歎息のとあ

るよし是

卅七右 よやといふ語の事

同左 四段活云の第四音によをそふる例古くもすくなき不審るけど

卅八右 やはめのしの末に将然云の出ると已然云の出るとみて云ハバ

へだちめあるあと

廿八左　老いらくゝおもらく乃訛誤の羽といへる数の事

廿九右　「」まくゝそまくゝの活らゆるあるおとゝ後のさゞ

卅左　こまくゝのほゝさ」ハ「こまくほゝき」あるを誤らんの為ニの

を添へゝるりのといふべきニハ非る事

卅一右　元真集なる「伊へまそほし」ハかゝらはきたし」の誤写な

るあるを

卅二左　「」けくゝといふハくをのべて云るのゝニハ非るさと

卅三右　「のゞけく」をのゞく「静々く」を点づくなとハいもれぬを考

ふべき事

卅四　「」ゝといふ辞のつくく延



卅四左　「」ゝ」をそふる格例

卅三右　「ありしゝ」と枝ニ云ハ非ありゆきゝ」あるへき数の誤乃

卅二左　元補集なる「あはつらくぞちられぬゝし」ハをゝ正保板の本

の誤なる事

○波巻目録

初丁右　「ドずのきゝゝ」枝づくゝ

卅左　「」ぢな　ぢゝ」いつれあるもの事

二右　「」ぬちゝ　つちゝ」と云て「」るゝ　「」るゝ」とハをかゝ云ん

ゞ又「」ぬゝ」ゝ　「」るゝ」ふいひて「」ぬゝ」ゝ　「」るゝ

「」ゝとハをゝくいまぞるさだ

二左三右　□ありハ□ありの約りこのこいつへゝやあゝびゝやのちゞ

三左四右　なゞらハ連用云をうけ又連躰云をうゝる事

四左　□ちんとてん□とのやう夫字而字ニあゝるうの事

五右　□なでゝとゝふことゝあれどてで□と云ことゝふなく、なちんハ□れ

どてちんハ□ちめ事

日左　あるゝべし」「ある〻べし」到る〻べし」と書侵れる類と「用ゐ

べし」といへるゞ正しきあるとを混へおりふまぎれきあと

六右　自他の詞といふハ大判ニてたゞ細判ニ成くある事

日左　入る入る〻〻吼く吼る

七右　んを已然ニいへバめ也ゑど□ゞと受る通例ある事、

七左八右　ありつる」と云て「有めり」とハじためやうなれど、「有ぬ」とハ

いひて「ありつ」とハをゝくいため也ゞ、

八左九右　う〻びも う〻ぶれ

日左十右　彩ふ色のちん□のふる青ゞもれそ四種

十左　暗色の絲棚こゝ毋ゝ〻ニて来と去との五物のハゝゝきち

毋の数ふ数ハぬをよゝ以ぐきおゝ

十一左右　ちゝバちゝちん「人ハちゝ」ちんの、「ちゝちん」ちゝちん有

同ゝうゝぬ数ゝ

十二左七右　「ゆり来ゝ」「ゆり来る」ちん□の別ちゞの古人のぬゝ

十三右　侍らちんとゝ色ゝる例

十三ウ〜十四オ　形容詞のちんとつのちんとの差別のこと　附活語雑話（十八）

の条のひがゝの意り

十四ウ　下二段活えけせてなどようちん」といへるを四段活のかさ

十五オ　などようちん」といへるときちちなどようちん」とゝへる

とに對へて処〻にてこゝろくべき事

十五ウ　来といふ詞のハ〻〻きたゞ一つ濁るさを

十六オ　五十音才五音工活らく頭ハ来のゝなりといへる事

十六ウ　こちん」きちん」をゞ笑ちん」さきちん」などゝ對へく

十七オ　きちゝ

十七ウ　万葉十七「時ちゝ」ハ「ちゝ」ハ「ちん」なるべき

十八オ　をやのさゞ

十八ウ　続後拾なる「ゆひちらりちん」らとのわゝる

十九オ　ぞの意ゝ通ふちん」

十九ウ　いつゝちも悪びある

二十オ　ま世ぞとまゝうゞ」ふ大ゝ円ゝくゝる事

二十ウ　まゞハ不の意ゝいゝちんよりハ不可の意ゝいゝぞよりんのちゞ

廿一オ　水のゝゝびゝゝ」を「ゝまゞ」と語るを用ゐ

廿一ウ　るまゞきゝ

廿二オ　兼盛集「ゝりまゞ」とあるハ写悪なるべしのさゞ

廿二ウ　ア解万葉「ふれまゞ」を「ふれまゞ」と悪俗のよむ数ひのゝ古人ゝ

あるべしやの論

廿二右 白菜のこゝ花とぞそまを「じ」字濁と正表のとの簡び

同左 おこ、おゝ、まゝ、とまゝ、このくりこと

廿三右 「ゝ」ハらんの活用とハいたるまゝ〻事

同左 あらゝ」と「あるらし」をいひけしとなるらし」をいへる類

ひの事、

廿四右 ゝらのゝつき処などみあ〻

同左 万葉三の あるぬべゝし」 日九のよるべゝ〻ゝ」やなど

廿五右 「ゝ」ゝうしハさむるゝ、「あらし」ハ穿るらし」ゝそ「あらし」

を離しもゝらるれど、「あらん」「あらんのゝ」は上のあゝ離



したゝ「ゝ」そゝるべきのゝこゝたゝぬ多ゝる類ひの事

廿五左 「つ」 廿六右 古来「つ」の秘伝などいふ事たゝげなれどいふゝの事

廿六右ヨリ 廿七左マデ 「つ」の委細の論定 此事ハ二巻のゝゝるみ

をゝてあゝるせ云べきなり

廿七右 てしゝるのゝを清むべきもたゝきに非ゝるべきなゝと

同左 廿二右 同じ類の云のゝなれど「ち」ゝ「ぢ」ハ用云をゝけもゝ「ぢ」ハ躰云を

うゝゝる事

廿三左 てヨをはハ古今一格ゝゝゝる事

廿四 むやめやんゝ「ゝ」めゝも

同左 そゝのゝ そゝのゝの雛別まゝ 氏巻ゝもあり つれな体と云

廿五右 初学のまゝゝゝやゝゝりのハいゝゝ論布しき事

同左　おその木を形状云の志こそむにべる例

卅六右　生ける利もあり」の説　生けりとも云ふ由の説

同　希将見君乎見常衣のよきさま

同左　ちくさ人あ〜失〜やの」れるる事　引くえんど　引〜えんど　引てあんど

卅七右　誰ぞ誰ら　云の事又

同左　誰ぞ何ぞ　などくち〜いつへる事

卅八右　思ひの人のなど用云を躰云てのとうくる例あるさま事

同左　ちひるをちるの書損ちるべきけぶ

卅九右　うくをつめふむ四るうを云云ハ下二段活の才四音ういる

中二段の活のき二音ふいへどつくちくの活ハ多ハおのづから雅心

まきこめる事並俗びこるるの進活やく古きらのもも人ん

ぬふ非る事、

同左　雨もふ〜ぬら」なるいくく頃つうひ古き延このくくハおりまく

ぢき事

四十右　るるをるるるとの共ぬ四段こ活くと下二段こるの古今の共

同　んの云のなるの辞

四十右　んせ〜〜もみ生ぬれ〜なる自らの事このくのひむハ化

四十一右　のうくまもいく格例

同左　伊るるく辞躰云ものさ又奇文こんと古ようるるさ

同　呂るいく辞ハ連躰云こつく例ハ万葉十六の不念呂々四印

点のオモハヌロのくさよろらんとありけよし

四二右 こその結びとなるけせてねへめれをぞだぞ又だぞこそ、
又だや、又ぞうともうけ、らぞや、又か、又ぞ、又こそともうらる
格をさとひのひさる、共にぞを略きてといふハ理り當ら
ざらんよし

同左 ねぞ ぬこの意 へぞ ふこの意 の結びの考すこさ

四三右 ぬことふこ近く聞ゆる ねぞ いと古くより分らぬ事

同左 んよりえといふこ近く聞ゆる ずぞ

四四右左 ずぞをそまくこ志おまての解釈の試こ

四五右 ずらん ずらりをざりらん ざりらりを然云るなりといふ

八及まじきりのさぐ

同左 けぞ けん のけハ過去の志己去のきの活らきある事

同 万葉八ある 将開可聞 サキニケバカモ とある古点

同左
四六右 ずらんのけと ずらりのけとハ異なる事

四六左 よらん なるらん などのけるも同じくして 若らん(コダチ)と又一つは
づらひありといふ說

四七右 ぐみ ぐみを截るて云こともつく云こともつく事

同左 ぐみ ぐみ とぞ古風辞とのを思執るまじき事並 ざかくみ

四八右 からされと云 ところ 形ふ とうれと云 る附 作に とそ差別あれぞかれ
をのぐしてかしされといふと釈くハ宜からぬ事

同左 ねなく　今なく　などのなく　皆なくて一意なりけるかなさ

四九右 第三音（くる）など　れのびて第一音（うら）など　は転（ウツ）りさて来よへくと

同左 らく　まく　まく　ハむをのべたりとはなれるものなれど、然し

云音の出る詞語

ぬるさ多かる事

五十右 けまく　けまくしのけの活らき也。但し此ハなりかなさぬ

五一右 「とくのべ」とあるを「くのびと」あるべくおもふよし

同左 なぬぞぞなん　あなる」と土佐日記にみえたる処の考へあるぬ

ほしき事

五二右 時鳥声まつほどまで」此歌のちし書紫式部家集と採集 古歌



ところべき事

同 「あらぬ」を「あらせん」とこそ云べき詞なる義

同左 をかし　おかし　かなのあと

同 「あなあひたるがたきまで」と云るに「あなあひたるがほの

まで」といへるとみなるむびの事

五三右 文章かきならふ人の心得べき事の一つ

同左 人をいたむ心もあらばのちし古家集と拾集とのかはりめよ

く味ふべき事

五四右 あはれおつ「つ」などを大かる人とてもおつるとハおのづからも

かくまじき事

目下本文と離れて



五四丈終行ヨリ五九丈

くりわけ其くさ〻の又それ〻人のはじめよりかなてあるべきもの也

五六

此書の仲物せ〻よりも手頃人の字し作るなどもハ改正もべき処あるものとなれる事

五七

あ〻四る人語を躰用ふるとし、それを又形狀・作用或ハ毎形躰・有形躰・などくさ〻の凡例

五八
五九終

躰用の差、無形・有形・の別も、形狀・作用・などの図説、

王緒繰分目錄 終